

## 「京都フォーラム2004」パネル・ディスカッション「山の現状と課題」

パネリスト：1 大津の森の木で家を建てようプロジェクト

山口美知子氏（大津林業事務所）

坂田 徳一氏（工務店）

2 ともいきの杉

小林 直人氏（林業家）

水上 克俊氏（工務店）

3 モクネット事業協同組合

加藤 長光氏（理事長）

新村 玲子氏（設計）

コーディネーター 佐野 春仁氏（NPO法人緑の列島ネットワーク理事）

---

### 緑の列島代表挨拶

加藤 長光（NPO法人緑の列島ネットワーク副理事長）：

NPO法人緑の列島ネットワークの加藤です。さきほどご案内がありましたように、ここで皆様にご挨拶と緑の列島の説明をいたすはずの理事長の大江が急病で出席できなくなりましたので、私が代わって説明いたします。お手元の「近くの山の木で家をつくる運動」のパンフ資料をご覧ください。ここに緑の列島の理念が載っております。これは今まで切り離されて来た林業と木材、住宅をつないで行きましょう、家をつくる側から山の方へはたらきかけながら、国産材の家づくりをひろげて行こうじゃないか、ということを目標に掲げたNPO法人です。3年ほど前に、この「近くの山の木で家をつくらう」と宣言し、それから2年ほど経ち、宣言から実践へ向けて、昨年度に新たな態勢を整えました。ここでの「フォーラム」のような、具体的な活動を通して、緑の列島の意義を見えるようにしていこうというものです。今回のフォーラムでは、関西自然住宅推進ネットワークの理事長の光島さま、代表の小谷様をはじめ、会員のみなさまにはたいへんお世話になっております。皆様のご協力に心から感謝いたします。

列島では、「地域グループ」の活動の支援や紹介を行っています。昨年からはじめていますネットワーク会議では、各地域で活動されているグループやネットワークの方々同士の交流や意見交換会をいたしております。本日も午前中にネットワーク会議を行っています。このことも後のディスカッションの折に紹介できればと思っております。

次に、「木質基準」ですが、地域の合った住宅を地域に合った基準でつくって行こうと、担当の専門員が全国の各地域を回って、大工さんや工務店の人々のお話を聞いて新たな基準づくりをしております。

そして「近山スクール」では、主に設計事務所の方々に木材のことを勉強してもらいたいと、現在、名古屋で開催しています。山や木の性質、流通経済、構造、など色々なテーマのもとで勉強してもらっています。

また、「森林ボランティア基金」という積み立ても行っています。まだ一度も使っておりませんので、ぜひわれわれのグループの援助をという方がおられましたら、事務局の方へご連絡下さい。

「出版事業」も引き続いて行って行きたいと思っております。木質基準のヒヤリングで回っている内容などはすでに「住む」という雑誌でその都度紹介して参りましたが、そのような内容を木質基準の策定へ向けて出版するという事なども考えております。

以上のような緑の列島や地域グループの活動を定期的に出しています「ニューズレター」やホームページにて紹介しておりますので、どうぞ、会員の皆様に活動の輪を広げるのに列島をご利用いただきたいと思っております。

## パネルディスカッション 「山の現状と展望」

### 報告 1

大津の森の木で家を建てるようプロジェクト

山口美知子氏（大津林業事務所）

坂田 徳一氏（工務店）

滋賀県の大津で行なっている活動について紹介します。「大津の森の木で家を建てるようプロジェクト」では、実行委員会を組織していますが、その事務局を県の出先機関である大津林業事務所ですべて行なっています。大津林業事務所では滋賀県全域を所管しているわけではなく、大津市と志賀町の2市町を所管しています。

大津地域の森林資源

（図2 大津市志賀町森林資源）この地域では、杉と檜が半々となっており、25年生から50年生までが突出してほぼ横ばいの量となっています。過去3年間の間伐の実績をまとめたものですが、（図3）40年生以上の木の間伐がほとんど行なわれていないというのが現状です。なぜこういうことが起きているかということ、さきほどの熊崎先生のお話にもありましたが、ほとんどが伐り捨てられているという現情があります。細い木が伐り捨てられるというのはまだしも、そこそこ大きく育ってきている木が山に伐り捨てられるということが所有者には納得がいかない。出して使ってくれるということが前提に無いと、間伐に向かえない。山から伐り出しても、今の値段ではとても合わないのです。林業白書では、杉の立木価格は、m<sup>3</sup>当り、4800円にしかならない。（檜で14300円）

木を出すのにいろいろな方法があるので、一概には言えないですが、大きな機械を使わない普通の費用で、搬出運送費は1m<sup>3</sup>当り、15000円ほどになっている。これでは出すだけ山側は赤字になるわけです。山側ではそういう問題をもっています。一方、町の方では、最近、団地の整備がかなり進んでいまして、京都大阪の通勤圏内ということで、どんどん家が建てられているのですが、ほとんどが大手のメーカーによって建てられているという現状です。

#### プロジェクトが立ちあげられたはじまり

平成14年、「地域材での家づくり見学ツアー」を大津でやってくれないかという話があり、ただ現場を見るだけではなく、そこで人に会って欲しいと考えまして、案内人の人選をいたしました。このイベントのねらいとしては二つあります。家づくりが地域の森づくりにつながることを実際に人の話を聞きながら感じてもらうということ、そしてこの機会をきっかけにネットワークができないかということです。先に触れましたが、大津の森林にはたくさんの杉や檜がありながら、ほとんど地元で使われていない。山で世話をする人がいて、伐る人がいて、製材する人がいて、施主がいて、大工がいるにも拘わらず、大津の木で家をつくっていないという現状に、それを結ぶネットワークができないものかと。実際にこのツアーをしてみて、周囲の関心の高さに案内人の人たちもわれわれも驚きました。人がつながる可能性として、実はすでに各地で個人や団体でいろいろな活動が行なわれていました。大津でもできるのではないかと、呼びかけをいたしました。

具体的には、森林所有者が2、森林組合2、素材生産業者1、製材業者2、工務店3、設計士2、その他3が集まりました。当初は月一回でしたが、それでは足りないということで、月2回のプロジェクト会議をしております。

#### 会議の役割

それぞれが抱える問題点の相互理解、どうしてうまく行かないかということ話し合っ、まずはお互いを理解し合うところから始めようと。次に、異業種間の情報交換と学習の場ということで、たとえば、ここにこんな木があるけれども、誰か使ってもらえないかというように、実際に使ってくれる人に声掛けができるような場にしよう。また、新しい技術や情報があれば、それを学ぶ学習の場となることを考えました。同時に、ここが大事なところですが、皆が連携できるようなルールづくりを進めてきました。このプロジェクトとしてどういうことを念頭において進めて行くのか、大津版地域材産地証明の仕組みについて、また木材の適正価格について、共通言語の検討について、机上での検討を続けています。

#### プロジェクトのコンセプト

最初に家づくりはまちづくりということを掲げましたが、まずは、大津を元気な地域にするためにということをお頭において、住まい手にも、作り手にも、そして環境にもよい家づくりを提唱しようというものです。住まい手よしとして、関西自然住宅推進ネットワークの考え方にもよるところになりますが、健康によい家づくり、only oneの家づくり、そしてこれが特色ですが、施主が実際に伐採など色々な機会に参加できるような家づくりを提案しよう。作り手よしの中には、地域経済に

貢献できる家づくりとありますが、いろいろな業者さんがかかわることで元気な地域につながるだろうという考え方を大事にしていますし、伝統の技を活かせる家づくりとして、大工さんが自分の技を活かせるような家にしたい。そして大事なのが、顔と顔が見える関係での家づくりです。おそらくこれが最もわれわれが目指しているものになって行くであろうと思われま。環境によしとしては、琵琶湖の水源を守るといこと、環境に負荷の少ない家づくりといこと、山を守るといことが琵琶湖を守ることにつながるのだとい意識を持ってもらえるような家づくりをしたいと考えています。

#### 地域材利用のシステム・産地証明の仕組み

産地証明について簡単にまとめてみました。プロジェクトのメンバーではなく、利害関係を持たない第三者機関に証明を出してもらおうと、地元の市民団体に働きかけをしています。地元の団体がこのシステムに関わることの意義を模索しながら、このシステムづくりを進めています。(図)

#### イベント企画・開催

このプロジェクトのもうひとつのポイントですが、机上の議論だけではなかなか現実が見えてこないといことから、また実際に木を動かしながら問題点を探ってみようといこと、木の伐採から、搬出、製材、刻み、棟上までを現在進めております。

約3ヶ月の葉がらしをおいて200%の含水率を70%ぐらいまで落として、雪が降る前に出そうといこと、搬出の見学も行ないました。出した木はすべて使おうといこと、人力で出せる端材を炭焼きにいたしました。

丸い丸太が四角い製品になるところを一般の人は見る機会がほとんどないといこと、出した木が製材所で製材されるところを山主さんと施主さんも一般の人たちと一緒に見学しました。どんな木目が出るだろうと、本当にときどきします。また、大工さんの刻みもなかなか見る機会がないといこと、かなり専門的な説明をしてもらいながら見学会を行ないました。次に、つい先日のことですが、家の構造見学会をかねて、山の伐採現場を見にいきました。

#### プロジェクトに参加して 坂田工務店

このプロジェクトでよくいいなと人に言われていることは、行政が引っ張ってくれていることですが、大事な点はリードされているといことではなく、一緒にやっていくとい意志です。というのも、滋賀県は環境県とも言われるように、琵琶湖を守るために森を元気にしていかななくてはならないとい風土がある。また滋賀県には木造在来工法を考える会、「木考塾」とい会があります。阪神淡路大震災の後で、木造住宅に関わる大工や工務店、構造の専門家、大学の先生や学生さんといった人たちが100人くらい集まって、これからの木造住宅をもっと考えましようとい、2ヶ月に一辺の勉強会をしている組織があります。こういう組織の中から山主さんが中心になってプロジェクトをつくったといこと、いいタイミングで行政との出会いがあったことが大きかったとおもいます。そしてちょうど設計中の住宅があり、お住まいになる方に、こういうプロジェクトで一緒につくるといこと、また顔が見える関係でつくるといこと、安心感が得られること、自分で関わることでより創造的に考え、行動してもらえると、家は共同でつくるもので、買うものではないといことを理解

してもらい、参加してもらうことになりました。平成14年の暮に呼びかけがあり、平成15年の5月に着工し、7月に棟上ができました。こういうイベントを通して、色々な方に呼びかけ、多くの人たちが集まってくるというところが、このプロジェクトを進める大きな力となっています。それは製材所でもそうですし、山主さんのところでも、森林組合の職人さんもそうですが、普段ものも言わない人がにこにこして説明してくれる。ましてや大工は自分が継承して来た技術を集まってきてくれた人たちに見せられるやりがいがあるわけです。そして住まい手の人たちはいろいろに気を配り、その気配りがまちづくりにつながり、地域経済をよくする。そういう家づくりまちづくりがもっと大津のまちに起こることを願って、このプロジェクトを進めて行きたいと思います。一方でたとえば、安定供給をどうするか、というような色々な課題がありますので、それを考えながら、プロジェクトを進めて行きたい。

佐野：ありがとうございました。後でこのつづきをしていただきますので、皆さんよく覚えておいてください。

## 報告 2

「ともいきの杉」 水上克俊

工務店の水上です。ともいきの杉という名前で京都府の美山町の小林さんの杉を供給するということをしています。林業の小林林業さん、製材業の小林製材さん、構造設計の田原建築さん、工務店の水上建設の4名がかかわっています。色々な業種が関わることで色々なことをしていますので、林業と製材の両小林さんを振り回してたいへんなんです。内容的には、各地で行なわれている産直と同じことです。50年、60年育てられて来た杉を葉がらし乾燥します。枝をつけたまま3ヶ月ほど山に寝かしておきます。含水率を落とすことで軽くなり、出しやすい。ここでは、正真正銘の小林さんの木であるということで、丸にKの刻印を打ちます。これもわれわれが勝手に考えた認証制度の方法です。トラックで製材所まで運んで、主に梁材に製材してストックします。3ヶ月以上自然乾燥します。お金がありませんので、人工乾燥はまったくしていません。葉がらし自然乾燥した材ですから、どうしてもプレカットには合いません。どうしても大工さんの手刻みによる加工が必要です。この状態で含水率は辺材部分では楽に30%を切りますが、芯ではなかなか乾燥しません。60~70%はあります。ところが最近使っている木は辺材も芯材も20%ぐらいまで乾燥しています。売れなくて6ヶ月も7ヶ月も栈積み状態で置かれているからです。そして、登り梁ですとか、伝統的な工法で、木を見せる家づくりをしています。また、知り合いの工務店さんや設計の方に買ってもらっています。そこまでは普通ですが、それに構造設計の田原さんや私がかかわることで色々なことをしております。

特徴をまとめてみますと、1に、ストックをしていること。梁の自然乾燥材をストックしているところはまずないと思います。梁成が15cmから30cmくらいまで、常にストックしていますので、注文があれば、すぐに出せます。次に、構造設計することで、構造強度の担保された合理的な軸組み工法の提案をしています。田原建築の得意とする構造設計で、関西ではなかなか評判が高い田原さん

ですが、われわれと付き合うことで、だいぶ硬派の人間が柔らかくなってきています。相変わらず厳しいことは厳しいですが、杉の構造的な使い方、表面的なヤング係数にかかわらず、金物の使い方や構造用合板との組み合わせなどを工夫することで、ある程度ボリュームを小さくすることで、コストを下げることに成功しています。第3に、さきほど緑の列島の方が新しい木質基準について説明されていましたが、一本の木を無駄なく使うための新しい基準づくりを行っています。僕らは出て来た木は全部使って欲しいわけです。杉の場合は腐れが多いです。檜や松と違って、杉は油っ気が少なく、枝打ちした節のところから水が入って腐りやすい。けれども、強度的には問題がないということを実験したりして使ってもらっています。実際、年数が経てば、わからなくなります。

スライド：ストックしているところです。なかなか売れて行かない。結構大勢の人たちが来て乾燥を確かめてくれますが、発注まで行かない。

スライド：林業試験所で、打音試験で、ヤング係数の測定をしているところです。

スライド：打音測定だけでは不十分だろうと、破壊試験をしているところです。これらのデータも出していますので、ご覧下さい。

スライド：新しい工法ですが、間伐材でつくっています。12cm角の材だけで家を建てています。

スライド：田原建築による設計のちょっと変わった杉のトラス工法です。仕上がった眺めもきれいです。

スライド：これが杉の腐れです。節の周りに黒くなっているところ、これは嫌われます。とても多いです。強度的には何の問題もないのです。赤身と辺材の白い部分も、年数が経つと変わらなくなりません。そんなことをお客さんに理解してもらって使ってもらっています。

スライド：実績がだいぶできてきました。われわれだけでなく、色々な方たちにも設計してもらっています。

先ほど特徴を3つ言いましたが、もう一つ、価格です。さきほども大津の方が言われていましたが、ともいきの杉では、小林さんから原木を25000円/m<sup>3</sup>で買い上げています。これは現在の市場価格からすると、とんでもない価格です。非常に高い。それを製品にして売っています。われわれがやっているのは、この25000円という価格で、山がきちんとやって行ける、植林して、手入れして、その後もちゃんとやっていけるという価格を小林さんに考えていただきました。もちろん、われわれも一緒に考えました。ただ、さきほど熊崎先生が言われたように、大型の機械化でもっとコストを下げられればいいのですが、われわれのような小規模では現在のところ、この25000円というところから出発せざるを得ないわけです。しかし、家となったときに、高い値段で買ってもらうわけには行きませんので、そこは工夫をしています。先ほど紹介しましたように、田原さんは少ない量の木材で済むような構造を研究してもらっていますし、僕のところでは、手刻みですが、むくの木をふんだんに使う通常の在来工法のプレカットの家と変わらない値段で供給できるようなシステムを工夫をしています。課題について4つほど上げてありますが、後にしましょう。

小林直人

今の問題は後にして、25000円という常識を超えた丸太の値段ですが、林業に関する本が出たり、

色々な方が林業の話をされますが、一番抜けているところが、経済です。ほったらかしにされている危険性が高い。文化も非常に大事ですけども、飯食わなくて文化はなしということもありますから、ともいきの杉は小林林業のフローに頼っています。水上さん田原さんにたいへんな荷物を背負わせているわけです。だめならほかで飯を食うよとなれば、真剣にはなれません。僕も必死になって考え、働きますし、その迫力を受け止めてくれて、実に頻繁に会議をします。どうしてこんな行動を僕がするかというと、さきほど先生も言われていた、日本の山の戦後の状態で、山の側も人間も、どこかで同じ失敗をしたという説明をすべきだという感想をもちます。昭和30年代の人工林の爆発的な増加、あれは林野庁の指導によるものです。新林業基本法をはじめ徹底して植えなさいと。それに一番応えたのは、20haくらいの比較的小規模の人口の多い層に的を絞られた。50haや100ha以上持っている人はあの当時無視された。人口が多い方が面積が大きいですから。全面的にてこ入れされたわけです。雑木を伐って、空いているところにも木を植えた。それは林野庁の基本法一本です。日本の方向を決めたのは研究者であり、山の評論家であって、決して山の人間は動機付けに加わっていない。ところが誰も出版物も一言もそれに対して口をはさまない。そのまま消滅してしまっている。僕のようなものだけが、フルにともいきの杉に頼っているのだから、こういう場に出てきますが、ほかには誰も来ません。山の人間が乖離してしまっている。そういう状態をもたらしたのは研究者や役人や評論家に大いに責任がある。こういう日本の林業をつくったのは、それを忘れてもらっては困ると、いつも思っています。僕は現場ではたらく人間として、蜂にもさされるし、マムシにもいやな思いをする。木の枝一本頭に落ちても夕方には亡骸ですからね。それが山の人間の現実です。そんな人間がこういう場に来て何をするかというと、役人さんや研究者の方に橋渡しをしなくてはならないと今、決めています。

佐野：ありがとうございました。この二つのグループを聞いたところで、だいぶ性格が違うことが見えて来たと思います。次に、この運動を先駆的に始められた秋田の木ネット共同事業体の加藤さん、よろしくお願ひいたします。

### 報告3

モクネット共同事業体 加藤長光

今日のタイトルは「山の現状と展望」ということですが、それは「地域の現状とまちづくり」につながるとさきほどの大津の方が言われていた通りだと思いますし、またそれはそのまま「モクネットの現状とこれから」につながっています。産直、産地直結と言いますが、それは各地域によって仕方が違うと思いますが、モクネットの産直に付いてのお話は、ここでは略させていただきます。パンフレットにモクネットのあり方について簡単に書いてありますので、それをご覧ください。今日のこの席では、建築家の新村さんにも来ていただいたので、まちづくりにつながる工夫、まちづくりの役割ということについて、お話しいただこうと思います。私からは、現状について話させていただきます。

このごろは「木の復権」ということが言われるようになっており、循環型の資源として、いよいよこう

いう運動が表舞台に出てきたのかなと思います。この内容に関しては、今日もお話しいただいた熊崎先生が秋田に来られた折に、バイオマス新エネルギーなどについて講演されました。まちづくりは地域の再生につながるということですが、いままでの工業を中心とした大量生産の時代にあつての林業や木材について考えるということではもはやなく、秋田には、現在の状況を予見したような素晴らしい言葉がありました。

「国の宝は山なり 山の衰えは国の衰えなり」(秋田藩家老 渋江政光 1602年)

これは秋田だけではなく、日本、世界にも言えることです。切り尽くせば用をなさない。その前にということですが、これは国有林のことです。秋田には二つの林業があり、一つは秋田藩の林業。これは400年500年続く秋田本来の林業です。もう一つは県庁の林業、植林された林業です。日本全国と同じで、植林された木をどうするか。これは日本の経済と一緒に、皆そろって負けた。熊崎先生のお話しにつながっているわけです。本来の秋田の林業は国有林となり、残念ながら、国有林は切り尽くしました。国もたいへんな目にあっています。これをよく考えねばならない。でも、なかなか地元では難しい。われわれは15年、20年前にそれで外に出ました。外に出て、皆さんと同じような運動を一通り仲間たちとしてきました。それで今は国産材のことについてはかなり意識されるようになってきたように思います。そして今は地元の二ツ井に戻ってきました。

まず、まちづくりをしていこうと。二ツ井は、秋田杉の原産地であるけれども、駅を降りても秋田らしさがひとつもない。山や杉、川はあるのに、家がない。町は白神産地の南にあつて、森林面積70%のうち、民有林50%、国有林50%。面積で50/50ですから、蓄積量で言えば、民有林はたいへん少ない。国有林は天然杉がありますが、まともに使える杉はない。杉がなくなると同時に人口も減少し、どんどん過疎になってきています。まさに先の山の衰えは国の衰えです。これは多分秋田だけではなく、全国の有名な産地に共通する話だと思います。(スライド)秋田の美しい米代川、日本三大美林の天然杉、白神山地と里山里地の風景です。二ツ井はかつて東洋一の木材産地でした。営林署が米代川の4つの支流ごとにありました。木材だけではなく、薪炭が精錬に利用されていました。山があり、鉱山があり、田んぼがあった。さきほどの熊崎先生の森と日本の文化の話につながっています。それが今、成り立たなくなっています。そこにまた大変な問題、市町村合併です。何の理念もない市町村合併に私は反対しています。産地としての自信をもつために、まちづくりの一端として林業や木材、森づくりを考えて欲しいと。そのために、ここに新村さんに来ていただきました。具体的に住宅を考え、家づくり、プロジェクトを通して、見える形にすることで自信を取り戻し、合併などなくても立派にやっていけるまちづくりをして行きたいと思っています。

木もちの会 新村玲子

関東で「木もちの会」をしている新村です。この会は光島さんが関西で自然住宅推進ネットワークをつくられたのと同時に関東でつくられたネットワークで、同じ趣旨で始めています。月1回の勉強会をしていますが、関東地区は色々な情報と工法が入り混じっていて、家づくりは環境問題だけでは解決できないという認識で、作り手も住まい手もきもちのいい、長持ちする木の家づくりをしようということで改名しました。この会はひとつのコンセプトにまとめるということではなく、色々な考えの中で様々な議論を交わしながら方法を探っていく会です。私はあくまでも伝統構法の木の家こそが



日本の家ではないかとがんばっています。関東では地産地消ということは難しく、山自体も涵養林として自然の山づくりという方向に転換しているので、どうしても木の産地とつながっていかねばならないわけです。そこでモクネットの都市と山をつなぐというところで接点ができ、10年以上になりますか、秋田に通って来ています。加藤さんも言っていました、秋田はもともと豊かな地ですから、豪農の屋敷があってもおかしくないのですが、それが見当たりません。そこで何とか地域に根ざした家づくりをということで、関東から行くのもどうかとは思いましたが、縁があって、関わらせていただきました。

ここで設計者として心構えたのですが、とにかく新しい素材で目新しい箱物をデザインするという設計者が多いのですが、それはやめて、とにかく地元の方たちの意向を拾い上げて、それをそのままとめて行くという役柄で臨みました。2, 3年は地元の方たちのアンケート調査だとか、工務店の方たち、山の方たちなどと色々会合をして、この地元にはどんな伝統と文化、使える素材があるのか、をピックアップしてきました。その結果、地元にはふんだんにある杉を前面に出した家づくりを進めてきました。他にもゼオライトという調湿性のある非常にいい素材があることがわかり、床下に敷こうか、壁に塗りこもうか考えました。この地域ではタタキが必要なのですが、そこに練りこむかとも考えましたが、タイルにした方が製品として幅の広い使い方ができると、タイルの試作品を焼いてみたりしました。結構いい風合いのものができました。ややコスト的に合わないのですが。その他、さきほどの話にも出てきましたペレットストーブもプランに盛り込んでいます。建具、家具など、地元で作られる物はなるべくプランに持ちこみました。机上の空論では意味がなく、なるべく現実的なものにして、土地は平均的な50坪、家族数としては3世代が使えるもの、収入からすると2000万円ほど、厳しいのですが頑張って坪50万円で40坪程度の家ということで計画しました。地域の特色として忘れてならないことですが、多雪地帯ということで、高齢の方たちでは雪かきがいへんで、車庫は建物と一体にし、車から降りてそのまま玄関に入ることができるようにしています。屋根の雪も自然落下してそのままにしておけるような形態としました。色々プランをまとめて、最終的に地元の方たちにアンケート調査を取りまして、事業報告書にまとめています。

とりあえずここまでですので、この後はこの案の実現ということになります。如何にして今後、1棟、2棟と建て、まちづくりを実現して行くかということがこれからの課題となっています。

## パネル・ディスカッション

佐野： ありがとうございます。これで今日起こしいただいたパネリストの3つのグループの方々にお話しいただいたわけです。新しいグループとベテランのグループがありますが、加藤さんのモクネットは何年になりますか？

加藤： モクネットとしては16年ほどになりますが、その前段に木創という会社、これは京都にもありますが、もともとは秋田です。光島さんは当時、二ツ井におられました。私と同じ商工会の会員で宣伝活動をしていました。木創という会社ができ、モクネットという組合ができ、国産材の家づくりという運動ができたわけです。

佐野： そうすると、木創からすると20年を超えているわけですね。二ツ井に地域型の住宅をつくられて、それが評判になり、各地の行政が見学に行っています。大きな影響力を持っておられるわけです。ともいきの杉さんの方も、さきほどのお話しでは20棟ほどを建てられ、スライドでご覧になられたように、都会的な感じを受けます。伝統というものをあまり表には出されていない。一方、大津のプロジェクトでは、今、第一棟目を建てられているところです。そういう年代の相違がありますが、共通しているところは、やはり山への思いと、山から自分たちが住んでいる家づくりまちづくりにつながるのだという意識だと思います。そういう中にもそれぞれの姿勢の違いがあって面白く感じました。

大津のプロジェクトでは、まず琵琶湖を守るという環境の意識があって、それを守っている森をきちんとつくりたい。一方で市街化が進む現状にあって、森が活かされていない。そこで森を活かす家づくりまちづくりが森を、琵琶湖をきれいにするんだと。そこに行政からの呼びかけがあり、プロジェクトが立ち上げられた。それに対して、ともいきの杉の場合は、まず、小林さんの林業の側からの声、危機に瀕した叫び声のような声、そこから始まった。山から木を降ろし出す、また植えて育てるのにいくらかかるか、という原価計算があり、それで何とか行けるような方法を考えようと不思議な4人が集まった。確かに25000円という原木値段は驚きかもしれませんが、立木で4800円というお話しもありましたね、おおよそ5000円で、それを伐って運び出すのに15000円かかるとなれば、合わせて20000円です。あと5000円で再生産できるのかということ、それもどうかと思います。単なる5倍という値段ではないと理解できそうです。それからモクネットですが、これは最初から規模が大きい。秋田杉の問題、国有林の問題、山と国がつながりあって、荒廃しつつある。これを何とかしたいけれども、地域づくりを秋田の中で閉じていては解決できない。それで都市と関係を結ぶということをした。全国ブランドの秋田杉の考え方もかもしれません。関東の都市とのネットワークをつくられた。そして地域の家づくりをしようと、今度は関東から新村さんが、新村さんだけではなく、たくさんの方が秋田に来られ、秋田のために動かれているわけです。そういう人の関係を加藤さんがつくられた。そういう活動をされているわけです。

坂田： 補足ですが、小さなネットワークがいろいろあることが、運動を活性化させていると思います。ここでは大津の森の木で家をつくらうというプロジェクトで来ていますが、滋賀県の場合、それだけではなくて、いろいろな活動が各地にあります。プロジェクトにどんな人たちがどんな気持ちで関わっているか、補足しておきます。基本的には、自分の住むまちがすきであるという人たちが集まって来ているのですが、お互いに認め合うという関係というところに壁があるなど、さきほどの小林さんのお話しを聞いて感想を持ちました。お互いに他を認める関係、さらに自分を高めることができるような人間関係、自分を高めて、相手にも影響を与えることができるような人間関係が、この会場もそういう場になっていますが、活動を深めて行くし、そういう関係をつくっていかないと運動としてはやっていけないと思います。また、加藤さんが20年来活動されているように、創造的に考え、緑の列島のように、体験を活かし、行動を起こすことの大事さを感じました。最終的には皆で共につくる、一緒に働きましょうという協働の意識が地域を動かす大きな原動力になるということをここで学ばせ

ていただきました。

水上： 補足することはたくさんあるけれども、やはり大津の方がうらやましい。行政の人が引っ張ってくれている。山がまちに近い。見学にも人が来てくれる。何ともうらやましい限りですが、ともいきの杉もがんばってきたので美山町もこちらを向いてくれるようになりまして、美山木の家というショールームを建てさせてもらえるようになりました。ともいきの杉でも、大津の方が言われましたように、美山町の人といっしょにプロジェクトを動かして行きたいと思っております。もともと僕が小林さんを知ったのも、モクネットで小林さんの山の見学があったところからです。また、モクネットで知った文章で、60年70年の木を使った家を見て暮らすというのは、時の流れを感じながら暮らすということで、それだけこの家を大切にしていきたいという文章を読んで、それで山のことを考えた木の家づくりを考えました。

佐野： 先ほど後に説明すると言われた4つの課題がありましたね。

小林： 最初の課題は立替の問題です。まずは4人の内の山で仕事している僕と製材をしている小林の二人で負担し、それから回収していく。それがうまく行くところを証明したいのですが、実際にはなかなかそうは行かない。ここで立替金が多いというのは、借りた金を借りて返すというのではなく、まずは伐採から始めますが、600m<sup>3</sup>、700m<sup>3</sup>という量を出すのに、人に頼まざるをえない。彼らは一番弱者ですからね、借金してでも彼らに手間代を支払ってやらなくてはならない。工務店に売れて行くまで山側が支えて行かなくてはならない。

水上： 伐採費用は伐採してから葉がらしがあり、製材してからも3ヶ月は置くわけです。製材費用も売れなかったら6ヶ月7ヶ月置かなくてはならないわけです。それが立替金です。製材前には整理が必要です。原木市場でも同じ径の丸太を揃えるとか整理してありますが、広い土場があって、しやすい。産直の場合は、一本の木を伐って出てきますので、そのまま製材所に持ってきたら、径もばらばらで揃わず、製材ができない。土場が必要となります。3つめの新しい基準に対する理解が得にくいというのは、こういう場では言いにくいのですが、一般の方のほうが理解してくれます。一本の木なんだから仕方が無いと。いわゆるプロの方はなかなか難しい。さきほどの腐れの写真でみたように、どうしても選びます。産直を考えてくれる人は環境問題についても意識をもってくれていますから、そこに甘えることにもなりますが。実際のところ、ああいう水が節のところから入って腐れを起こすというのは、杉だけです。北欧材やラジアータパインなんかは油っけが多くて、そんなことにはならない。でも、それで杉を使わなかったら、この国はどうなりますか。実際には耐力的にも問題がないし、時間が経てばわからなくなるのです。それから4つ目にストックする場所です。どんどん売れば問題はありませんが、そうもいかない。美山町は田舎と言え、そう空いた場所がない。フォークリフトがつかえるような舗装したヤードが欲しいということです。

小林： 原木値段の25000円は乱暴かもしれませんが、小林林業の杉が皆腐れがあって、それで

25000円と言っているわけではありませんよ。玉石混交で、均して25000円なんです。

加藤： 今お聴きしていて、これはみな自分たちが通りすぎて来た問題だなと。ただ、解決はしていません。地域はほぼ崩壊に近い状態です。でも、そこが面白いところで、立替金の問題も、ストックヤードの問題も、たいへんなことなんですが、何とかクリアーして来ています。大津の方が行政が関わってくれているとありましたね。美山町の方もこちらを向いてくれつつあると。モクネットの場合は、最初から林野庁と県が関わっていましたが、町というのが抜けていた。町を飛び越えて話が進んで来た。このことが非常に大きな問題となっています。さきほど言いましたが、合併の問題で出てきています。県と市と業界が協同するのは大事ですが、やはり住む人たちの理解がないと、行政も施策を落としこめなくなる。これから運動を進めて行くに当たっては、ぜひまちをしっかりと取りこんで一緒に進んで行くことです。

佐野： もう一つの論点は、グループの大きさです。大津の会では15人の実行委員からなっているということですね。

山口： はい。いまのところは木が実際に動く仕組みをつくろうと検討している段階ですから、顔の見える関係で、この仕組みに責任が持てるだけの15人のメンバーでやっています。組織を大きくしようと言うことは考えていません。

佐野： ともいきの杉では、現在4人ですが、もっと仲間を増やそうとか、協力してくれるグループを他につくって行こうとかは考えていませんか。

水上： もちろん考えています。でも、なかなか一緒にやろうという人がいません。美山町の方でも、顔の見える家づくりということでわれわれも採用してもらっていますが、町の人自身の理解がまだ十分ではないなと一緒にやっていると感ずることがあります。一つはやはり材木の値段です。われわれの値段が通常のものより高いので、合わせるように注文が来ます。でも、それでは山が成り立って行かないから、こんな活動をしているという根本的なところがなかなか理解してもらえない。

佐野： モクネットの方では会の規模ということはどう考えていますか。

加藤： モクネットでは、会則がありません。会費もないし、会員も明確にはない。ただ、知らぬ間にモクネットに関わっている。特別な意識をもたないで関わってもらおうというのが基本です。ただ、色々な面でリスクは分散しようと。会員を集めて、会費をとって活動すると、事務局がたいへんですね。モクネットではですから、関わっているのが5社なのか20社なのか、100社なのかわかりません。ただ全国からいろいろな方が来られて、その方々に材料を供給しています。ただし、簡単には材料が届かない仕組みにはなっています。一つには秋田に来ていただく。相当な覚悟がないと来れない。インターネットや飛び込みもありますが、そういうところにはお断りしています。

佐野： こうした運動は、さきほど坂田さんが言われていましたように、そう大きくない活動体それぞれが個性的で、しかも明確なビジョンをもって、あちこちに点在しているということがいいのだらうと思います。ともいきの杉で小林さんが杉の原木値段を25000円に決めたところから始めるというのも、明確で個性的な立場だと思います。市場原理で動くのではなく、それを修正していく立場を意識的に取られているわけですが、そうした立場を経済としてどう考えて行くのか。

小林： 一番難しいところですが、市場原理と言うのは今では常識ですが、ものの売り買いというのは、物々交換か、お金で買うか、その2種類しかありません。お金を払うのが当たり前だとわれわれは思っていますが、地球全体で見ると、どうやら物々交換の方が多い。物々交換ではないけれども、お金を払ってもらうのが物々交換に近づくような、そういうものの考え方を、修正市場主義と思ってます。それは近畿大学？で、池上浩一さんという先生が書いておられるところにヒントがあると思っています。

佐野： 今日のことまでのフォーラムを振り返ってみますと、熊崎先生の基調講演がありました。木の文化の復権を通して日本の森林を甦らせるということをタイトルにしてお話しされました。前半では歴史的な各地の林業形態がそれぞれの地域の文化や産業を背景に育って来たということをお話になりました。後半ではしかし、一変して、日本の戦後の林業方針がいかにも誤ったものであったかということ、また、スエーデンやイギリスの例をもって、山の経営の近代化、大型の機械を導入して、あるいは山の経営を小規模な山林所有者にではなくて、それらをまとめてまかされるような広域な管理会社を組織するような、そういう仕方を示されました。またバイオマス全体を効率よく活かす工夫、やがて杉一辺倒の人工林ではなくて、もっと自然な生命の多様性のある有機構造の大きな森林の姿というものを掲げられました。後半のパネラーの皆さんによるディスカッションでは、しかし、そうではなくて、一人ずつでいい、まずお互いに顔の見える信頼関係をまずつくって、木のよさを確認し合おう。木のよさはみな、ある程度よく知っている。知っているけれども、そうではないほかの要素に左右されて、木を十分に活かして使えていない。その問題点をみなで認め合おう。除けるものならば除去していこうと、そういう運動を色々に始められたわけです。ここに大きな姿勢の違いがあると思います。市場原理で動くということではない、もっと大きな原理があっているのだと。ただ、それをどうして一般の人々に伝えて行くか、表現し、わかってもらうか、それが今、皆さんが抱えておられる現実の問題だと思います。また、皆さんのご努力というのが色々見えて来たのではないかと思います。その辺りについて熊崎先生、いかがでしょうか。

熊崎： 小林さんのお話は批判として僕たち研究者にも向けられていると受け止めています。この場で落ち着いた格好でうかがってました。ただ、小林さんの言われている市場原理と木の文化ですが、僕がお話ししたのは、木の文化というのはとても大事だけれども、日本の皆さんはだから、木が高くて我慢してくれ、というふうには行かないということです。どうしてもそっちの方に話が言ってしまうのですが、林業の方でもずいぶん反省しなくてはならないと思います。よその国と比べ

て、あまりに高くていいのか。1m3の木を出すのに25000円はやはりかかりすぎだと思います。どっちが正しいかと言うと、これは妥協しかないと思います。たとえば、スエーデンの場合、北欧はみなそうですが、林産業と山の所有者とが価格について話し合う。これらの国は自分の国の資源に依存している。だから、自分のところの林業が破壊したら林産業が成り立たなくなる。それで林業が立って行ける価格を守る。それを話し合いで決めているのです。林産業の側が指示するから、山の方も頑張る欲しいと。そこがいいと思います。日本の場合は、たとえば製紙工場のパルプ材の買い付けなんかを見ていると、海外と日本を簡単に天秤にかけてしまう。日本の価格が合わなければさっさと海外に行くわけです。目先のことしか考えていない。どこか考えが足りないわけです。さきほどお話ししましたように、木の文化と産業とは密接に絡んでいるのに、木の値段ばかり見て、山のことを考えない。日本の山のことを考えるということはとても大事なことです。

僕は日本の近くの山の木で家をつくる運動の呼びかけに参加しています。なぜ参加したかと言うと、戦後、日本人は違って来たと思うのです。さきほど加藤さんが秋田藩のお話をされましたが、そのときに僕の翻訳したK・タットマンの本を紹介してくれましたが、彼はその本を書く前に、秋田藩のことを書いています。翻訳されていませんが、いい本です。昔、秋田の山が荒廃した時に、秋田の人々が、役人だけではなく、農民や商人も皆一緒になって、秋田の山を立て直したというのです。とてもすごいことだと感じました。地域というのがあって、その山の木を伐って行く。木は減って行き、荒廃するわけです。それはいけないと皆が立ち上がって、山を立て直す、そういう地域の伝統があった。それがいつからか、日本全体でおかしくなっているわけです。地域というのがなくなっている。官主導型で、みな中央にしたがって、そして今度はグローバリゼーションです。熱帯から安い木材が入って来るわけです。なぜ安いかというと、それは森林を壊して持って来ているからです。山と切り離されてしまっている。それが全然分らなくなっている。地域の森と切れてしまっている。そういう格好で、グローバリゼーションの中で、官主導型の日本の林業は壊れてしまった。それで次に出て来たのが地域中心で考えようということです。ある意味で当然のことですね。このグローバリゼーションの動きの中で、地域の地場産業というのをどうやって立たせて行くかというその答えの一つだろうと思います。これからは非情な市場にまかせたやり方ではなくて、互いに歩み寄るような、一緒にやっ行ってこうという姿勢が求められて行かねばならない。それも地域での運動の仕事だろうと。講演ではちょっと市場の話を強調し過ぎたかもしれないけれども、山の人たちも、コストがかかるからというのではなくて、コストがかかるけれども、どうやって下げられるだろうかということをもっともっと研究しなくてはいいだろうと思います。

佐野： ありがとうございます。こういうお話を聞きたかったのです。それで、では、これから先、具体的にどういうシナリオが書けるだろうかということ、できれば先生に窺えれば嬉しいのですが、後で時間がありましたら、お願いします。この辺で会場から発言や質問があればうかがいたく思います。

会場から1(兵庫県女性)： 震災の後で産直による家を立てていただきました。8年間、気持ちよく

住わせていただいています。モクネットの加藤さんにお会いできて嬉しかったです。私が産直の自然な家に住みたいと思ったのは、毒を出さず、自然に朽ちて行くような家を建てたいと願ったからです。説明を聞けば、輸入の材木で建てるのと国産材を使うのでは100万円ほどの違いしかなかった。それなら輸入のシステムキッチンをやめて、大工さんに簡単につくってもらえば、それで国産材でも帳尻が合う。さきほど熊崎先生が話されたように、皆、国産材を使いたいと思っているし、国産材の家に住みたいと思っているけれども、頭からそんなことは不可能だと思い込んでいます。それがシステムキッチンを押さえれば可能だとなれば、皆さんも考えることでしょう。そういうPRをすべきと思います。さきほどの新村さんのお話がとても興味深かったです。私も田舎に行くと、がっかりすることが多い。最近では田舎ほどツーバイフォーが売れているのが残念です。熊崎先生の言われる山の側の努力になるかもしれないけれども、まずは農山村が美しくあって欲しいし、自然にとけ込んだ家が美しいということを含めた説得力を持って欲しい。まずは農山村の方たちがなんて汚い風景になってしまったんだろうというところから始められないものかと思います。もう一つ、緑の列島さんをお願いしたい事ですが、木組みの家はツーバイフォーの家とは違うメンテナンスが必要で、そこらの大工さんには難しいのではないかと。ぜひメンテナンスのネットワークをつくって欲しい。大工さんもあちこちでメンテナンスで見て回ることで技術的に向上するように思います。去年も要望しましたが、その辺はどうなっていますか。

加藤： 会場にいる設計士さんや大工さんはそうでないのですが、多くの技術者たちは木のことを神棚に上げて、新建材ばかりを扱ってしまった。技術がないとは言えませんが、木を扱う技術を持ち出すことをしなくなってしまった。仕事をしていてそう思うことが多いです。同じことが林業や山の人も言えます。木のことを実はあまりよく知らないのが製材所だと思います。木のことを知らない人が求める木のことを知らないという意味です。高く売りたい木のことはよく知っているけれども、それはこの頃は木の家に住みたいと思う人は求めていない。その辺をよく考える必要がある。林業の方は規模が小さすぎる。熊崎先生が言われるように、ある程度の大規模化、所有権や管理権といったことをしっかり考えていかないと難しい。

メンテナンスに関しては、伝統構法に特化したネットワークもあります。「木の家ネット」というのがよく知られています。これは伝統的な木造技術の色々な職種のひとたち、左官屋や建具屋、塗装屋などが集まっています。ちょっと覗いてみてください。

坂田： 施工の側から維持管理について一言。お客さんからすれば、木の家に求めているのは、安全で安心ということです。安心というのは、顔が見えるから安心というのではなくて、いつまでもお付き合いできるということが安心で、そういう関係ができるということが大事だと思っています。それは大工だけではなくて、左官屋も建具屋もそうですね、そういう人たちがずっとその地域で仕事をして行く、後継者をきちんとつくって行くということが、こういう運動を続けて行く上で必要なことだと思っています。そういう色々な職種のひとたちが運動に積極的に参加して行くことが大事です。木の文化というのは、そういう地域ではたらく職人の文化ですし、そこでその地域らしさが出て来るわけで、その「らしさ」が自分たちの誇れるものとなり、それを住まい手さんと一緒に地域にもたらす

ことが、元気の出るまちづくりにつながると思っています。そうして職人さんたちがやりがいが出るという風に運動を展開して行きたい。

新村： 価値観ということですが、施主が何を目標にして家を建てられるか、目先なのか、一生のことなのかということで、ものの価値観が変わって来ると思えます。森を護って行こうというのも、結局は私たちの健康を護ることにつながりますし、安全に暮らすことにつながる。メンテナンスということですが、きちんとした家づくりをする工務店や大工というのは、自分たちのつくった家を愛しています。いい加減につくった家は、その前を通るのも気が引けるものです。つくった家はいつでもどうなっているか、気になる。お金をかけてきちりつくった家は一生、工務店や大工とのつきあいが続くものです。何か気になることがあれば、工務店に連絡をとってください。嫌な顔をするところはないはずですが、それから町並みですが、モクネットの見学旅行で、山形県の金山というところに行ったことがあります。そこは町づくりに成功した町ですが、みな元気で町に誇りをもっていて、観光に来たわれわれに色々見せてくれる。いい循環をしているなど感心して来ました。四国の馬路村も元氣村で、がんばっています。いい町並みには流れがあります。同じ形が気持ち悪く並んでいるのではなくて、同じ系統で統一感がありますね。そんな家づくりをして参りたいと思います。

水上： 50代の大工さんなら伝統構法でも何でもやれます。30代ではどうかわかりませんが。メンテナンスはきちんとやるのが当たり前です。そういうことをちゃんと唱っているところに仕事を頼むことです。

会場から2(学生女性)： さきほどからネットワークづくりということが話題に登っていますが、一般の人にどういう情報提供の仕方をとっておられるのか。また、実際にそのグループで家を建てようとされた施主はどういう動機でそのグループに依頼したのか。

山口： 大津では、行政が関わっているということもあり、行政が出来る範囲での情報提供をさせてもらっています。この秋には住まい手を探すということもあって、消費者向けのセミナーを開催する予定をしています。一般的な木の家のよさや家づくりの広報では限界がありますし、色々な問い合わせに対応していると、理解が十分に伝わっていないと感ずることがあります。やはり地道な勉強会や、直接現場に触れる体験などをどんどんやって行くしかないな、と思っています。折り込み広告を何千何万とやっても効果が上がらないと私は思います。家を依頼してきた施主さんですが、どうしても地元の木を使った家づくりをしたかったということです。われわれ山側の方も、木を伐って供給すれば、使ってくれる人はかならずいるものだと、イベントを通して分ってきました。そういうことを通して木が流れる仕組みをつくって行きたいと思っています。

坂田： 一般の人たちを大工さんの仕事場に連れて行く体験イベントで、大工が木を使って行く考え方の話を聞いていた方が、住宅展示場を回りながら感じていたこととは違い、色々な考え方が家に



こめられていること、価値観が窺えたことなどを喜んでもらえた。そういう影響を与えられたことがわかりましたし、大工さんも喜んでいました。

水上： われわれのところは実際に商売をしているところですから、どういう風に宣伝するかということは大きな課題ですが、これから美山町と一緒にショールームをつくり、そこで皆さんに情報提供ができと思っています。それから構造見学会や竣工見学会など色々な見学会をさせてもらい、そこで来ていただいた人たちに色々説明させていただく、また今年の4月から、「ともいき通信」というのを発行しています。建てられたお客さんの動機ですが、環境に配慮したという人や、シックハウスなど室内環境を考えて自然素材を使いたいという人が多いです。

加藤： モクネット自体は住宅づくりを自主的にしていませんので、特別なことはしていませんが、国産材を使うというフォーラムはときどきやっています。秋田杉は国産材の1ブランドですから、国産材が売れば、自然、秋田杉も売れて行くだろうと思い、国産材を鍼めています。家を建てようという方、工務店、設計士、大工など、全国の色々な方々をバックアップできたらと思って活動しています。また、大工塾をしています丹呉先生や山辺先生、また光島さんといった人たちとは役割分担しながら進めています。特別な会員はいないとさきほど申しましたが、そういった人たちを通して、設計の方や工務店に紹介していただいています。

新村： 私たちのところに来るお客さんたちは、かつて私たちが発信したものを探り当てて来られているようです。やはり元のものが強ければ、きっとどこかで引っかかって来ると思います。こういう家づくりがありますよと、どんどん情報提供をして行かねばならないと思いますが、正しい目で耳で見る、聞くという基本的な姿勢を大事にして行くことだと思っています。

会場から3（会社員男性）： 私は九州の林業会社に勤めていますが、親会社が電力会社で、山を3、4000町歩もっております。7、80年生のかなり手入れの行き度届いた山ですが、材価が低迷している中で、将来を心配しています。山の手入れをしなくてはならない一方で、価格が上がらないということで、川下の方に手を広げて行かねばならないだろうと思っていますが、木をたくさん使った住宅を今年はモニターリングということで建ててみます。環境のことも考えて、新建材も合板も使わない家をつくっていますが、一方で住宅性能評価というものがあって、グレードとしてどうなのか、他所のものよりもどうなのか、というところで矛盾を感じています。今日はみなさんのご努力を伺って、非常に勇気づけられました。来年からまだまだ数棟の規模でしょうけれども、これを事業化したいと思っています。自然素材や国産材、私どもの育てた杉やひのきを使ってくれる住宅メーカーと提携して行くつもりです。やはり現場で色々なかたちで訴えて行くということが本当に大事だということをおぼせていただきました。

一つだけお聞きしたいのですが、住宅性能評価ということをお客さまから問われた場合、皆さんはどのように答えられているのか。

新村： 個人的には、国で決めている住宅性能表示の全てがありがたいとは思っていません。私たちは自分たちがやっていることに自信をもってやっていますし、自分たちがどこに力を入れているかをていねいにお話しすることで、また、住宅性能表示がなぜ始まったか、本当にお金をかけてやる必要があるのかということの説明をあげることによって理解していただいております。部分的には、性能表示を無視していると答えることもあります。日本全国での法律が住宅のすべてに合致するかどうかは、あなたが判断してくださいということもあります。

会場から4(女性)： 今日、ここにお集まりの皆さんは似たり寄ったりの価値観を持っておられる方ばかりなので、こういういいお話になるのだと感心して聞いていました。この話をぜひ行政や山の人たちにも聞かせてあげたいと思います。過去にまちづくりの会に参加したことがあります。行政があまりに山のことを知らなさ過ぎる。山や農業に携わっている人たちがどういう状況に置かれているかということを知らなさ過ぎるといふところに、価値観の違いが出て来るといふ思います。それに行政に大きなビジョンがない。今日ここで伺った方向が100%正しいかどうかはわからないけれども、一つの方向性が示されていることをたいへん嬉しく力強く思います。ぜひ、こういう会を機会ある毎に山の人、行政、消費者の前でやって行って欲しい。

加藤： これはモクネットだけではなく、他のネットワークとも共通していることですが、そもそもこういう運動がどこから始まっているかということ、その一つに生協運動がありました。顔の見える関係もそこから始まっています。国の政策としても進めていることですが、地産地消という方針です。最初に山を訪れたおばさんたちがモクネットを始めたのです。ですから、山の人や行政に頼むのではなく、ぜひ自分たちから運動を起こして、ネットワークをつくらうという気概をもって、こういう運動を拡げて行って欲しい。緑の列島はそういう人たちを応援します。

佐野： まだまだ会場にご意見をお持ちの方が多数見えるようですが、残念ながら、時間となってしまいました。この辺でパネル・ディスカッションを閉めたいと思います。最後になりましたが、今日の午前中に、今前にお見えのグループの皆様と、ほかにもいくつかのグループの代表の方々と一緒にネットワーク会議を短い時間でしたが、行ってあります。その内容はほぼここで紹介されたことに重なっておりますが、その代表の方をご紹介します。山梨県で八ヶ岳家づくりの会「木の香」の代表をされている松田俊介さん、香川県で讃岐の舎(いえ)づくり倶楽部の代表、菅徹夫さんです。今日のこのフォーラムの内容はいずれ、出版はできるかどうかわかりませんが、何らかの方法でまとめたものを公開いたすつもりでありますので、その折にはぜひご覧下さい。今日は長時間にわたるパネル・ディスカッションをご清聴いただき、ありがとうございました。

## 主催者代表の挨拶

小谷留好： 今日は本当にたくさんの方にお出でいただき、たいへん嬉しく思います。われわれは自然住宅を考えようと10数年前に会を発足し、色々な活動をして参りましたが、その中で、どうし

てもやっておかねばならない問題がこの山ということでした。国産材を使って行くということを正面から取り上げなければならないと思っておりました中で、緑の列島さんの理解をいただき、今日のこのような立派なフォーラムを開催することができました。関係者のみなさまには大変なご苦勞をお掛けしましたが、そのおかげでこんなにたくさんの方が集まれ、主催者を代表してお礼を申し上げます。熊崎先生はじめ、各グループの皆様にはたいへん貴重なご意見をありがとうございました。

熊崎先生のお話にもありましたが、日本の国土の三分の二は山であるにもかかわらず、外材を使っている。山に関わらず、自然やエネルギーの問題を産んで来ています。今日、ガソリンが高騰し、合板もストックが品薄になりつつあって値段が上がっております状況で、このようなフォーラムが催されたことには大きな意義があります。私たちに恵まれている自然をもっと大切に使う家づくりをして行けば、私たちの地球環境、自然環境のみならず、社会環境もまたきっとよくなるだろうと思えます。本当にありがとうございました。